とあらん、是をあはれまざるは不仁なり、故に此書其神をゑらしめ、飼ものをして、其鳥を死せざらしむ、予に同じき鳥飼あらば、これを信せよ、おそらくは其妙をうるにちかゝらんと云、

〔喚子鳥止〕ゑがひこしらへ用の事

一すりゑといふははいざこをやき、ほし米とぬかのいり粉青葉の汁にてこねたるものなり、又その鳥により生ゑはつたい多少のかげんあり、またくるみ入も有、いさい左りにゑるしあり、

一なまゑははいざこ小ぶなまじり、その外何にても川魚いろ〳〵まじりたるもくるしからず、ゑかしはいざこをよしとす、

一はつたいはくろ米壹升、ぬか壹升五合のつもりにて、兩方ともいり、粉にひきふるひ、はつたいにするなり、此はつたいは何鳥にても右のかげんよし、

一あをみはせり、又大こんば、又はなのは、又ははうきゞよし、

一くるみは、火にてあたゝめたるがわりよし、

一すりゑの仕用は、すりばちにて、さきへあをみをすりて、其後なまゑを入、よくすり、のりのごとくなりたる時に、はつたいをいれ、せつかいにてよくこねまぜてよし、又くるみ入るゝ鳥は、なまゑ入るゝ時くるみ入、するべし、はつたいを入まづ水すこしづゝ入て、こねまぜてよし、はつたい壹匁に、なまゑ四分いるゝを四分ゑといふ、五分いるゝを五分ゑといふなり、はつたい壹匁に、生ゑも壹匁入を當分ゑといふ、はつたいより生ゑをおほく入るを、さゞいゑとも、つよゑともいふなり、つよゑこのむ鳥を、さゞいと申ゆへ、さゞいゑといふなり、

一あはせ粉といふ仕用あり、是はすりゑむつかしき時に仕る事なり、小鳥少々かふ者のために、こゝろやすくよき事なり、仕用はまづ七分ゑの鳥ならば、生ゑ七匁にても七拾目にても、粉にはたき、右のはつたいなまゑ七分に、壹匁のつもりに合せ、よくまぜて、うすにてひきふるひ、何ほど